

金子修一主編

『大唐元陵儀注新釈』

汲古書院 二〇一三・二刊

B5 四二六頁 九〇〇〇円

『新唐書』卷二〇礼楽志によると、唐代皇帝の喪葬儀礼は、高宗朝の顕慶礼編纂時に、凶事は臣子の言うべきことではないとして、『貞観礼』にはあつた国郵篇Ⅱ天子凶礼部分を削除し、崩御時は臨時に考えて行い、終われば諱んで伝えないので、後世に伝わらなかつたとある（天津透『古代の天皇制』二六三頁の註25を参照。初出は一九九七年）。したがって、『通典』凶礼に収録されている「大唐元陵儀注」等と題する、唐代宗の喪葬儀礼の式次第を詳細に伝えた一連の逸文は、唐代皇帝の喪葬儀礼の全貌を復元、研究する上で貴重な史料であるといえる。

本書は、そのような一連の「大唐元陵儀注」（以降「元陵儀注」）の逸文を集めたものであり、概ね主要な二つの部分から構成されている。一つめは、「元陵儀注」全体を理解、把握する上で重要な事柄を記している部分（第一章「大唐元陵儀注」について）であり、「元陵儀注」の解説、解題（文献・各論）、各項目の概要、代宗喪葬儀礼の関係年表を含むものである。とりわけ、第一章第一節「大唐元陵儀注」解説」は、『通典』における引用配列と実際の式次第の順序との相違、前後の項目の接続不備や欠落というような史料読解の前提となる諸事に加えて、「元陵儀注」が実際の使用を前提

として作成されたのか否か（便覧か典範か）という問題、および引用者である杜佑の「元陵儀注」に対する視点（引用の意図）といった史料の性格から後世の評価にまで踏み込んだ内容が記されており、本書または「元陵儀注」を利用する場合には必読と思われる。

二つめは、「元陵儀注」を収録している『通典』の項目ごとに「元陵儀注」の本文を掲げ、校異・読み下し・註釈・現代語訳・解説を加えた部分（第二章「各論」）であり、いうまでもなく本書の中心部分である。本書は二〇〇二年から二〇一〇年にかけて刊行された「大唐元陵儀注試釈」等（以降、「試釈」を基礎とするものであるが、当該部分（第二章「各論」）には多くの増補改訂がみられる。まず、全体に関わる点でいえば配列の変更である。「試釈」では喪服変除の祭である「小祥変」「大祥変」「禫変」が『通典』の配列どおり喪葬儀礼の最終段階に位置づけられていたが、本書では易月短縮によつた実際の代宗の喪葬儀礼日程に準じて埋葬以前に位置づけられている。これによつて、唐代皇帝の喪葬儀礼をより実態に即した形で理解しやすくなっている。次に各項目をみると、読み下しにおける振り仮名や、宋『新定三礼図』明『三才図会』等からの喪葬具図の引用が徹底されたことで儀礼のより正確な理解が可能となっている。また、ほぼ全ての項目において註釈が新たに加えられており（18）「禫変」では倍近くに、その内容も「試釈」時より整理されたものとなっており、なかには「試釈」時の疑問や問題点に見通しを付けたものもみられる（28）「耐祭」等）。なお、こういった傾向は解説部分にもあてはまる（28）「耐祭」における儀式進行の整理等）。また、本書で新たに設けられた事項と

しては現代語訳があり、各儀礼の進行を簡便に把握するのに適している。

以上が本書の主要部分の概要と特徴であるが、その他附録として劉向陽（乾陵博物館）「唐乾陵の文化景観のもつ内容と特性」（附録一）と本書執筆メンバーによる「唐皇帝陵踏査記」（附録二）が掲載されている。前者は唐高宗と武則天の合葬陵である乾陵の詳しい紹介であり、現地関係者ならではの貴重な情報を含むという。後者は唐十八陵の一部とその陪葬墓の文字どおり踏査記であり、豊富な写真と簡潔な現状報告が今後の踏査に有益と考えられる。

（山下洋平）